

- 15 髭をかけて寝る事
- 16 祝言の時の結び様の事
- 17 平髪結び様の事

〔付記〕 本稿をなすにあたり、貴重な資料を閲覧させていただきました
東北大学附属図書館、東京大学附属図書館に厚く御礼申し上げます。

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|---------|----------|----------|--------|-------|--------|---------|--------|-------|--------|-------------|--------|--------|---------|---------|--------|---------|--------|-------|-----------|---------|------|--------------|
| 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 九 | | 26 | 25 | 24 | 23 |
| 初春ふし水の事 | お歯黒といふ事 | かね道具の事 | かね初の事 | 耳きぬ初の事 | 帯とき的事 | ふかそぎの事 | かづき初の事 | 鬢道具の事 | 髪置の事 | 翌年誕生の事 | うぶぎ色直し染小袖の事 | 食い初めの事 | 百日の祝の事 | 五十日の祝の事 | 同下向の時の事 | 宮参りの事 | 誕生の時祝の事 | 万祝の次第 | | 宿直の犬張り子の事 | おとぎ這子の事 | 天児の事 | 燭台すみとり其外道具の事 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 十 | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 女中躰 | | | | |
| 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | | |
| 長髭の事 | 白紅の事 | 引き裂き元結の事 | 祝言の絵元結の事 | 絵元結の事 | 長髭の事 | 髭かけの法 | ふかそぎ前の事 | 髪あげ初る事 | 爪化粧の事 | ふし水の事 | 化粧の事 | 眉初めの事 | 眉作る事 | 聞神の方角の事 | 玉女の方角の事 | 同作法三ヶ条 | ゆすりつきの事 | 鬢そぎの事并 | 髭かけの事 | 着初め様の事 | 小袖脇付けの事 | | |

- 3 腰巻の事
- 4 下げ帯の事并下げ様の習
- 5 かいどりの事
- 6 足袋の事
- 7 衣装の事
- 8 十二月衣装の事 (十五ヶ条)
- 9 祝言の腰巻の事
- 10 下げ帯の事
- 11 ひらつけ帯の事
- 12 織物無紋の小袖の事
- 13 丸すずしの事
- 14 唐織小袖の事
- 15 紅梅小袖の事
- 16 かげ浅黄萌葱の小袖の事
- 17 織物心得の事
- 18 箔の小袖の事
- 19 そうけし鹿子の事
- 20 ぼたんの事
- 21 織すじの事
- 22 通しはくの事
- 23 雲はくの事并襲の事
- 24 紅梅小袖の事并襲の事
- 25 御衣桁に小袖かけ様の事

八 産所の次第

- 1 懐妊身持ちの事
- 2 五カ月岩田帯の事
- 3 帯寸法仕立ての事
- 4 帯する方角の事
- 5 吉日の事
- 6 かにとり小袖の事
- 7 うぶぎの事
- 8 うぶきぬといふ物の事
- 9 うぶぎの色直しの事
- 10 着初の方角の事
- 11 物裁つ時の事
- 12 前掛けの事
- 13 打蒔桶の事
- 14 胞桶の事
- 15 寄り掛かりの事
- 16 片高畳の事
- 17 子安繩の事 結び方口伝
- 18 腰掛け寸法の事
- 19 むつぎの事
- 20 湯桶の事
- 21 熊の皮の事
- 22 産所畳の事

- 37 追善の歌書く事
 38 短冊寸法の事
 39 御製の短冊の事
 40 御宸筆の短冊寸法の事
 41 短冊一二字題の事
 42 三四字題の事
 43 短冊名乗りの事
 44 古題の事
 45 古題短冊の事
 46 短冊の丈の事
 47 色紙の寸法の事
 48 短冊三折りの事并図三品
 49 三四字題の事
 50 色紙短冊の事
 51 恋歌などの事
- 六 縫ひ物の事
 1 御衣の事并住吉物裁ち日の事
 2 小袖の事
 3 仕立物三つの手利きと申事
 4 直垂仕立て様の事
 5 長絹の事
 6 下の袴の事
 7 夜の物の事
- 8 ふとんの事
 9 寝巻の事
 10 祝言の時の事
 11 御座褥といふ事
 12 手褥の事
 13 同祝言の時の事
 14 上敷の事
 15 枕品々の事
 16 蚊帳の次第
 17 小袖仕立て様の事
 18 おさな裁ちの事并裁ち様男女の作法
 19 物裁ち時の事
 20 上刺し包みの事
 21 物裁ち刀の事
 22 裁ち板の事
 23 物差し
 24 絹巻きの事
 25 絹張りの事
 26 しるしの事
 27 あやはり并しんしの事
- 七 女中装束の次第
 1 十二単の事
 2 緋の袴の事

- 17 七夕の事
- 18 七夕遊びの事
- 19 七夕祭りの事
- 20 孟蘭盆の事
- 21 十五日蓮の鯖の事
- 22 八朔の事
- 23 重陽の節供の事
- 24 亥の子の祝の事
- 25 十二月朔日川ひだりといふ事
- 五 女中文法品々
- 1 豎文の事
- 2 腰文の事
- 3 内封文の事
- 4 結び文の事
- 5 糊封文の事
- 6 正月文の事
- 7 三月三日文の事
- 8 四月朔日文の事
- 9 五月五日文の事
- 10 六月二十九日文の事
- 11 七月七日文の事
- 12 八月朔日文の事
- 13 九月九日文の事
- 14 十月亥の日文の事
- 15 披露文の事
- 16 脇付の次第
- 17 豎文表裏整へ様の事
- 18 折りて整へる文言の事
- 19 晴の豎文上包の方
- 20 内封文の方
- 21 腰文の方上中下三品
- 22 目録の事
- 23 進上の事
- 24 目録の形上下二品
- 25 覚書認め様の事
- 26 かね折紙の事并図
- 27 香典目録の事并図二品
- 28 紙目録の事并図二品
- 29 弔い文に書くまじき文言の事
- 30 祝言の文心得の事
- 31 色紙に歌書き様の事
- 32 文の袖書に歌書き入る事
- 33 短冊に歌書く事并題のあるなし二図
- 34 月見花見の歌書く事
- 35 短冊にしるのび歌書き様の事
- 36 天子の御歌書き様の事

- 19 ちん参る事
 - 20 粥参るべき事
 - 21 座敷にて嗜み給ふべき事
 - 22 ならみ食ひの事
 - 23 もぎ箸の事
 - 24 こみ箸の事
 - 25 うつり箸の事
 - 26 膳ごしの事
 - 27 横箸の事
 - 28 辛き物の事
 - 29 固き物の事
 - 30 歯音高き物の事
 - 31 湯茶参り様の事
 - 32 お通りの人々心得の事
- 三 酌の次第
- 1 銚子持ち様の事
 - 2 ひさげ持ち様の事
 - 3 盃の事
 - 4 公卿持ち様の事
 - 5 開き酌の事
 - 6 結び酌の事
 - 7 別れ酌の事
 - 8 盃参り様の事

- 9 人にさし様の事
 - 10 貴人へ盃上げ様の事
 - 11 お流れといふ事
 - 12 召し出し酒たべ様の事
 - 13 箸初等の時三三九度盃の事
 - 14 祝言合盃の事
- 四 五節供の次第
- 1 朔を元三といふ事
 - 2 鏡餅歯固の事
 - 3 鏡餅の事(二)
 - 4 七草の事
 - 5 十五日へあかの粥の事
 - 6 わたまし等の時の粥の事
 - 7 五ヶ日といふ事
 - 8 二月八日疫神はらひの事
 - 9 桃の節句の事
 - 10 雛遊びの事
 - 11 衣替への事
 - 12 五月五日の事
 - 13 あやめふく事
 - 14 氷室の事
 - 15 土用の事
 - 16 水無月祓の事

- | | | | |
|----|-----------------------|---------|--------------|
| 12 | 卷数礼式披露の事 | 35 | 念数香箱あげ様の事 |
| 13 | 文披露の事 | 36 | 琵琶琴参らせ様の事 |
| 14 | 小袖を下つ方へ下され様并拝領の事 | 37 | 炭を火鉢に置く事 |
| 15 | 巻物の披露の事 | 38 | 貝覆ひの事 |
| 16 | 唐糸絹糸披露の事 | 二 万通ひの事 | |
| 17 | 綿披露の事 | 1 | 宮仕へといふ詞の事 |
| 18 | くけ帯又はくけざる帯披露の事 | 2 | 衣替への事 |
| 19 | 相・ねり・綾・紅梅の披露の事 | 3 | 御通り腰卷上げ様の事 |
| 20 | 杉原類披露の事 | 4 | 御膳据へ様の事 |
| 21 | 肴披露の事 | 5 | 御汁変へ様の事 |
| 22 | 花披露の事 | 6 | 介添心得の事 |
| 23 | 御楊枝参らせ様の事 | 7 | 御飯参り様の事 |
| 24 | 燭台出し様の事 | 8 | 二三の汁参り様の事 |
| 25 | 蠟燭芯取り様の事 | 9 | 飯に汁かけ様の事 |
| 26 | 御手水掛け様の事并年始心得の事 | 10 | 中酒参る事 |
| 27 | 御小袖召させ様の事 | 11 | お湯参る事 |
| 28 | 節妻戸通る時の心得の事 | 12 | 湯漬の七五三五々三参る事 |
| 29 | 隠所御供の事 | 13 | 式三献雑煮据はり様の事 |
| 30 | 風呂御供の事并閑伽拭き様・浴衣召させ様の事 | 14 | 饅頭参り様の事 |
| 31 | 御寝所取り様并御客床取り様の事 | 15 | 麵類参る事 |
| 32 | 碁双六出し様の事 | 16 | 鶏卵参り様の事 |
| 33 | 御簾かけ様の事 | 17 | 水織参る事 |
| 34 | 草紙参らせ様の事 | 18 | 金団参る事 |

以上の四点は、縦約一四糎、横約一九糎の横本で、同一の料紙を使用し、筆跡も同じである。なお稿者が調査した限りでは、東北大学附属図書館には、『女礼集』としてのこれらのツレ、すなわち残りの六巻はない。奥書に、『女中しつけ』など幸辰までの伝系しかないものもあるが、『正徳元暦仲秋下浣』とあることから判明するように、『女中輯礼』と同じものである。これらによつて『女中輯礼』にはなかった「五節供の次第」「よろついわるの次第」の存在を知ることができるので、『女中輯礼』はもともと十巻であったと考えられる。ただしこれらは伝授の時に相伝されるもののような、あらたまつたものではなく、『女中輯礼』の方が装丁もよく、字も丁寧で、『女中輯礼』の転写本と考えるのがよいと思われる。しかしこれらには『女中輯礼』には見られぬ注が付されている。例えば『女中しつけ』のもの一つは以下のようにある。(私に読点を付し、二字のおどり字は開く。濁点は原文のままとする。)

ほうほうまゆは白きはをき本まゆの中へ少すみを入ル也。きしだてと云は下一文字にして上をまるめに作なり。大かたまゆは上へ下よりまるめに作りし也。禁中の女中は本まゆの上ゆひ〔虫損〕ツふせおきて両方へ作る也。両へひらひらも沓ツふせ也。公家衆のは上はおなし事にて両方へは式ツふせ也。武家の女中のまゆは白きはにつけて作る也。両方へひらひらも沓ツふせ也。

このような注は、『女中輯礼』に見られないものであり、さらに辰方の説を伝えている可能性もあり、貴重な資料である。こうした注から考えて、『女中輯礼』が元本で、それを学習した結果、『女中しつけ』などが成されたものと思われる。そしてそのどちらもが、礼法資料として価値

のあるものと言えよう。

△注▽

1 『女礼集』については、拙編『女礼十冊書弁解全注』(一九九八年、和泉書院)を参照されたい。

2 水嶋―伊藤系の『女礼集』の各項目の目録を、東京大学附属図書館に所蔵される『女礼集目録』を参考にして巻末に整理しておく。伝系の違いによる各項目の配列等の違いについては別稿を期す。

3 東京大学附属図書館所蔵本については、拙稿「国学者林龜瑞相伝『女礼集』について」(『秋桜第十七号』平成十二年三月)を参照されたい。

△目録▽

一 女中躰方品々

- 1 御前にて宮仕への事
- 2 屏風立て様の事
- 3 月夜の灯火出し様の事
- 4 灯火かかげ様并消し様の事
- 5 香炉の火取る事
- 6 香炉の灰押し様の事
- 7 香聞き様の事并渡し様上中下の事
- 8 銀葉の事
- 9 薫物心得の事
- 10 御髪に匂ひ留め様の事
- 11 料紙硯参らせ様の事

それが前掲『女礼集』のように一冊に合綴されていれば、部分的に散逸することはない。しかし、一巻一冊ずつのものは、部分的散逸の可能性がなくはない。部分的に伝わるものはもともとそれしか伝わらないのか、それ以外が散逸したのか不明なことが多い。そのためか、同じ「女礼集」のうちの一巻でも、別々に扱われていることがある。東北大学附属図書館に所蔵され、内容は「女礼集」のうちの一巻でありながら一括ではなく、別の目録番号が付されている以下の四点がその例としてあげられる。

○『五節供の次第』（目録番号 六・一八〇一九）

奥書は以下のようにある。

右女礼集者古事新事交合初学為門弟綴之而深令秘事後学可被改予非者也 穴賢

水嶋卜也之成

正徳元暦仲秋下浣 伊藤甚右衛門幸氏

同 隼太幸充

同 将曹幸督

同 隼太幸辰

○『産所の次第』（目録番号 六・一八〇七二）

奥書は以下のようにある。

右女礼集者古事新事交合初学為門弟綴之而深令秘事後学可被改予非者也 穴賢

水嶋卜也之成

正徳元暦仲秋下浣 伊藤甚右衛門幸氏

同 隼太幸充

同 将曹幸督
同 隼太幸辰

○『よろついわるの次第』（目録番号 六・一八二九四）

奥書は以下のようにある。

右女礼集者古事新事交合初学為門弟綴之而深令秘事後学可被改予非者也 穴賢

水嶋卜也之成

正徳元暦仲秋下浣 伊藤甚右衛門幸氏

同 隼太幸充

同 将曹幸督

同 隼太幸辰

松岡平治郎辰方

坂田段治能賢

同 段治能直

○『女中しつけ』（目録番号 六・一八二〇〇）

奥書は以下のようにある。

右女礼集者古事新事交合初学為門弟綴之而深令秘事後学可被改予非者也 穴賢

水嶋卜也之成

正徳元暦仲秋下浣 伊藤甚右衛門幸氏

同 隼太幸充

同 将曹幸督

同 隼太幸辰

の礼法書である(注1)。比較的多くの伝本が現存し、全十二巻のものもあるが、それよりは十巻からなるものが多い。伝授書として写本で伝わったこともあつてか、諸本によつて異なる所も少なくない。そうした相違点を考える上で注目すべきは、伝系で水嶋卜也の次に誰の名前が記されているかである。それによつて、巻名や配列が異なる(注2)。「女中輯礼」は、水嶋―伊藤系であることは前掲の奥書から明らかであり、とすると同書と同じく東北大学附属図書館狩野文庫に所蔵される『女礼集』(目録番号 六・一八二〇六。写本一冊、袋綴、縦二二・九糎、横一六・七糎、一面九行)が参考資料として注目される。それには次の奥書がある。

右女礼集者古事新事交合初学為門弟綴之而深令秘事後学可被改予非者也 穴賢

水嶋卜也之成

伊藤甚右衛門幸氏

伊藤市右衛門陽澄

桑門行忍常省

伊藤嘉兵衛氏附

井上甚五左衛門正富

伊藤市右衛門附方

同 市郎左衛門陽方

天保九戊戌歲九月吉日

『女中輯礼』と同じく水嶋―伊藤系であることが知られる。これは十巻が完備しているので、これによつて各巻名を記すと以下のようになる。

- 一 女中しつけ方品々
- 二 万かよひの事
- 三 酌の次第
- 四 五節供の次第
- 五 女中文法品々
- 六 ぬひ物の事
- 七 女中装束の次第
- 八 産所の次第
- 九 万いわるの次第
- 十 女中しつけ

この巻名は、同じく水嶋―伊藤系の東京大学附属図書館や金沢市立玉川図書館に所蔵されるものとはほぼ同じである(注3)。これらによつて『女中輯礼』の通し番号は、正しいものとはいいがたく、朱で記されたものが正しいと言えよう。また欠本は、「四 五節供の次第」と「九万いわるの次第」であることが判明する。

三

前節で「五節供の次第」等を『女中輯礼』の「欠本」という表現をしたが、もともと八巻しか相伝されておらず、「五節供の次第」「万いわるの次第」は欠本ではないと考えられなくもない。しかし、その可能性はないと思われる。

「女礼集」で、正式に相伝されたものは十巻十冊であると考えられる。

東京国立博物館に保存されている（後略）。

右に付け加えることとしては、前掲の『女中輯礼』奥書の伝系にあるように、小笠原流諸礼家の伊藤幸辰からも学んでいたことである。なおついでながら述べると、松岡辰方の娘は、久留米藩に仕えた水嶋之成の子孫の卜也（初代と同名）に嫁いでいる（久留米市立図書館所蔵『御家中略系譜卷之二十九』）。この事は幸辰に学んだことと何らかの関係があるのではないかと思わせるものがある。松岡辰方は、礼法の歴史において、注目に価する人物と言えようから、その辰方がかかわったと考えられる『女中輯礼』についても、それなりに注目に価すると考えられる。しかしこの書について述べられることは、またこれまで特にとりあげられることはなかったようである。そこで『女中輯礼』について紹介したい。

二

『女中輯礼』は次の四冊からなる。

- 一 外題はなく、扉題に「女中輯礼 一万装束／七化粧」とある。扉題の「一万装束」の下に朱で「一」、同「七化粧」の下に朱で「十」とある。漢数字は、通し番号を示すものと考えられ、朱の通し番号は他本によって付したものである。内題に「女中しつけ方品」「女中しつけ」とある。奥書は前掲の通りである。
- 二 外題はなく、扉題に「女中輯礼 二通／三酌」とある。扉題の「二通」の下に朱で「二」、同「三酌」の下に朱で「三」とある。内題に「万かよひの事」「酌の次第」とある。奥書は前掲の通りである。

三 外題はなく、扉題に「女中輯礼 五文法／六縫物」とある。扉題の「五文法」の下に朱で「五」、同「六縫物」の下に朱で「六」とある。内題に「女中文法の事」「ぬいものゝ事」とある。奥書は、「右女礼集者古事新事」云々の箇所がなく、伝系のみである。

四 外題はなく、扉題に「女中輯礼 七装束／九産所」とある。扉題の「七装束」の下に朱で「七」、同「九産所」の下に朱で「八」とある。内題に「女中装束の事」「産所の次第」とある。奥書は前掲の通りである。

さて、通し番号は「化粧」と「装束」が重複しているが、それに従って内題と共に並べると以下のようなになる。

- | | |
|------|---------|
| 一万装束 | 女中しつけ方品 |
| 二通 | 万かよひの事 |
| 三酌 | 酌の次第 |
| 四（欠） | |
| 五文法 | 女中文法の事 |
| 六縫物 | ぬいものゝ事 |
| 七装束 | 女中装束の事 |
| 化粧 | 女中しつけ |
| 八（欠） | |
| 九産所 | 産所の次第 |
| 十（欠） | |

『女中輯礼』という書名は一般に流布するものと異なるが、内容は「女礼集」などと称されるものと同じで、小笠原流諸礼家が伝えた女性向け

東北大学附属図書館所蔵 『女中輯礼』について

A Study on "Jochū syurei"

陶 智子

SUE Tomoko

一

東北大学附属図書館(狩野文庫)の蔵書には小笠原流の礼法書が多く含まれている。その中の一つに『女中輯礼』(目録番号 六・一八一―七。写本四冊、袋綴、縦二一・三糎、横一五・七糎、一面十行)がある。この書は、全四冊のうち一冊を除いて、巻末に次の奥書がある。

右女礼集者古事新事交合初学為門弟綴之而深令秘事後学可被改予非
者也 穴賢

水嶋卜也之成

正徳元暦仲秋下浣

伊藤甚右衛門幸氏

同 隼太幸充

同 将曹幸督
同 隼太幸辰

松岡平治郎辰方

坂田段治能賢

坂田段治能直

右の伝系に見られる松岡辰方については、『国史大辞典』(吉川弘文館)に適切に述べられている(鈴木真弓氏稿。よみがなは省略)。

松岡辰方 一七六四―一八四〇 江戸時代後期の有職故実家。通称は平次郎、のちに清助、清左衛門。字は子弁。号を梅軒・双松軒と称す。明和元年(一七六四)二月十二日に生まれる。父は浪人酒井黙止。辰方の代に筑後国久留米藩有馬家の老女松岡の名跡を継ぎ、江戸森本に住した。御扶持人・納戸役などを歴任する。学を好み堀保己一・伊勢貞春の門に入り屋代弘賢らとともに武家の故実を修めた。『温故堂塙先生伝』に「凡大人にしたがひをしへを受るなかに、術を得たる人すくなからず。屋代弘賢、松岡辰方、稻山行教、石原正明など、ことにその旨を得し人どもなり」とみえ、『和学講談所御用留抄』には、奈佐久左衛門・屋代太郎(弘賢)・横田孫兵衛とともに会頭と記され、塙保己一を輔けて『群書類従』出版の事業に参画した。公家の故実は、高倉永雅に学び束帯の衣紋を実習して桜田組を組織し会頭となつて江戸に高倉流を広めた。塙保己一の学問、伊勢貞春の武家故実、高倉永雅の公家故実を継承して、みずから松岡流と称した。書物・調度などを収集・製作することを好みその遺品は後世皇室に献上され、現在、蔵書は宮内庁書陵部に、調度類は

すえ ともこ(文学科国文専攻)